

Sさんへの手紙

徳島出身で東海地方に住むSさんから手紙が来た。先般、子供の友人の父上が亡くなられ葬儀に参列した。そのとき手渡されたリーフが同封されていた。それは、葬儀式について「とあり、内容は「清め塩」は必要ない。「友引」にとらわれるべきでない。それらは迷信だ。というもので、このリーフは文責者かかれていない。

Sさんは「小さい頃、父母より「清め塩」とは霊が間違っているのではないように「友引」にお葬式しないのは、再び悲しい別離である。お葬式を出すことのないように願う」と願うとのことと記憶しています。この地では紙片に書いてあることが常識のようです。が、「住職の「意見を」という要旨の丁寧な手紙である。

私はすぐ以下の手紙を書いた。Sさんには失礼だが読者のみなさんも関心があり、かつ賛否両論ありそうなので本誌に掲載させて頂くことにした。

拝復、「家族一同お元氣の様子、お歎息申し上げます。さて、おたずねの件、お答えになりますかどつつか。純佛教的に考えるならこのリーフは正しいことです。しかし現代の日本人が脳死を死として受け入れがたいように理屈どおりには行かないのが人の生死に関わる問題です。友が死んでも自分は連れていかないでといつのが心情的ではないでしよつか。また、猿は死を認められないのか猿の子供が死んでも白骨化

してバラバラなってしまうまで抱き続けるといいいます。同じ佛教圏でもチベットでは最後の布施として自分の身を切り刻んで禿鷹に喰わせる風葬、ヒンディー教徒は火葬の後カンスに流すのを最上とします等々奇妙な儀式とも思える風習が世界各地にはあるわけです。

そのよみもの一つに塩で清めることがあります。これは相撲の作法で見られるように万物は塩によって清められるといつのは古くからの日本の風習です。また、大安、友引といつのは江戸時代に定着した風習です。

この結果、徳島の火葬場などは休みです。これが香川の西讃地方に行くと全く無視し友引に葬儀が行われています。

おわかりのよみに葬儀とは佛教で執り行われていても、実は神道や日本の古くからの風習を伴っているのです。最近、無宗教の葬儀が時々報道されます。沢村貞子の旦那がそつでした。何かの時に彼女の書いたものには「或いは津川雅彦かも知れません」では佛教式に一周忌、三回忌とやっているようです。ここでは無宗教といえども葬送の儀式はあるといつこと

一冊の本 『鳥たちのいる風景』

草薙ひろし (日下守) 定価二千円

著者は佐那河内村の出身。長年城南高校で英語の教鞭をとられた。長年のおつきあいの私であるが、歌人であること、日本野鳥の会「の古い会員であることは知らなかった。先生を一口で言えば、やさしい先生である。そのやさしい人の自然、ことに野鳥たちとのふれあいが本書編纂の基本となつているように思ふ。

先生の人間性がほとばしるよみに野鳥と人間の関係を歌でまとめあげている。それも万葉集、古今集をはじめとして歴史をこえ、さらにご専門の英米文学の分野で空間をこえ、言語をこえ、短歌に俳句、自由詩とにひろがる。なかでも中西悟道が詳しく紹介されている。この道の人にはよく知っているかも知れないが、「日本野鳥の会」のこゝと、歌心のない私は教科書だけの記述しか知らなかった。もちろん先生の短歌もすばらしいが、著者訳の英文詩も新鮮である。こゝこゝと、いく冊もの本を自費出版されている。先生に敬意を表する。本書購入希望の方は電話0881-631-7940まで直接連絡されたい。

↑ジを開くと口絵の写真に「日本野鳥の会」徳島県支部長、菅良寛武氏のホトトギスの写真がある。実はホトトギスの声がかましくて眠れないほどの環境のなかで住んでいて、この年になるまで木の枝に止まっているホトトギスを見たのは、逆光線一回だけである。したがってホトトギスの毛色を知らなかつた。まず、それに驚かされて一気に読んでし

をもう一度確認ください。次に、これでは物足りないので、或いは土地風のあわないのでと葬儀をやり直す場合がありまふ。これが理屈通りに行かないといつ証明です。香川県出身の大平総理は東京ではキリスト教で、地元では佛教(真言宗)で執り行われました。純粹の考えると教理の上ではどうなるのでしよつか私でも問いたくなることです。難しくなりましたが、これが葬儀の現状です。

余録

コンピュータの二千年問題は遠くの問題ではない。当山では平成五年にシステムを再構築したとき二千年問題対応という指示を出したつもりでいた。ところが今一回一番はじめのところだけが平成ではなく西暦下二桁になつていて、それに郵便番号の七桁移行でシステムを改修してしまつた。余談だが、これには郵政省に損害賠償したい。こいつとき他のトラブルがつきもの。ちよつとしたことからエラーが生じる。六年前と違つてころはEメールで送つてもいい、それでプログラムを改修できるらしい。私のよみものにはどうして無理な世界。技師と息子とでやりとりする。そつて来山願つことが半分以下ですむ。便利な時代になつた

十二年秋に修復して以来五十二年ぶり当時は物不足のとき屋根の銅板が不足していた。このたひの修理でまた五十年は大丈夫だろつ。この年はいろいろあつたよつだ。先月号に昭和二十三年とあつた小松島への出張が行われたのはこの年が正しい。詳しくは昭和二十二年四月五日から十日間であつたといつ。学齡前の子供の記憶ゆえお許し願いたい。

ある友人のお嬢さんはロアンジェルスのある大学で勉強している。入学には英語の力をはかるトールフル六五〇点で入学した。普通むこうの短大は四五〇点、学部は五五〇点ぐらいで入学できる。この点は満点に近い成績である。徳島の高校では不可能な点である。まず、これに驚いた。それでも先方の大学では宿題が多かついていくのがたいへんだといつ。奥さんが英語に堪能なのでEメールを駆使して家族あげて支援しているといつ。第二の驚きである。こつとしてアメリカの大学に正式入学するとその日からいきなり大学英語の講義。一時間三時間ぐらゐの予習復習が前提で宿題が課せられる。それが向こうの大学である。知り合ひの学生が留学しても三ヶ月間は手紙も来ないのが普通である。

また、葬儀屋の都合で風習が変わることも目の当たりにしてあります。

私も僧侶は別の問題ですが、一般の人が見てどの葬儀に正しいといつものはありません。要は亡き人を偲ぶことが第一。それとともこの「された方々のやすらぎが得られるかどつつかといつことです。昔からの風習はその意味の経験則といえましよつ。

本堂と護摩堂の間の渡り廊下を修理した。昭和二十

また、僧侶は別の問題ですが、一般の人が見てどの葬儀に正しいといつものはありません。要は亡き人を偲ぶことが第一。それとともこの「された方々のやすらぎが得られるかどつつかといつことです。昔からの風習はその意味の経験則といえましよつ。

本堂と護摩堂の間の渡り廊下を修理した。昭和二十

また、僧侶は別の問題ですが、一般の人が見てどの葬儀に正しいといつものはありません。要は亡き人を偲ぶことが第一。それとともこの「された方々のやすらぎが得られるかどつつかといつことです。昔からの風習はその意味の経験則といえましよつ。

本堂と護摩堂の間の渡り廊下を修理した。昭和二十